

26/9/13

PR33 ~ PR70

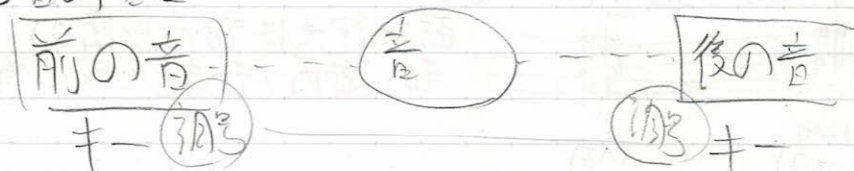
○臨時記号の効力

調号以外(音符単位)で覆われる#、b、nの記号

それがついた音符からその小節が終わるまでの同じ高さの音符に有効

(確認のために不要な所につけることもある、その場合は()で示す)

臨時記号をつけた音符がタイで次の小節まで伸びた場合、伸びた先でも効力を発揮する

○キーの判定と音階固有音
ある音の音名

前のキー/スケールを確認、その後調号に依りてめる

曲全体のキーは終止や転調部分のキーを見る

○変化音と変化記号の付け方

変化音、音階固有音に含まれず、半音で次音に進める音

~~下から上に音を上げる際は#で、上から下に下げる際はbで書く~~
(なので同音で#とbの2パターンの書き方をする)

○歌のキー/移調

歌手や楽器の実力として出ない音域の×ロディーは調転の必要がある

×ロディーの音構造をそのままにして高さを他のキーに移すことを

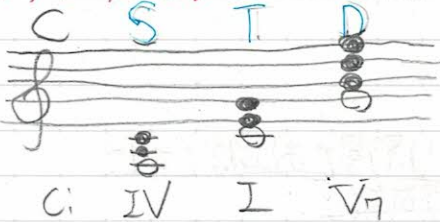
移調やトランスポジションというキー同士の必要な距離を調べ、新たな調号の五線に全体を平行移動する
楽器によってはスケールが完全に固定されているものもあり

{ ピアノは C 固定
トランペットは B $\flat$ 固定

コード理論

コードのファンクション(機能)

ファンクション: コードが属する調における立場や役割



I音 → トニック (主音)
 IV音 → サブドミナント (下層音)
 V音 → ドミナント (原音)

I, IV, Vの3つのコードを主要三和音/スリーコードという
 (以下、教科書に従いIをT, サブドミナントをS, ドミナントをDと略記)

代表コード以外にも、各コードはT/S/Dの機能をもつ

また、そのときのキーによって各コードのT/S/D種別も変化する



D (ドミナント機能)

ドミナント 独特の緊張感がある、ドミナントはトニックに進行しようとする

D → Tのコード進行を特に解決進行という

V7 ... 特に強いドミナント機能をもつコード

このコードはどつちのキーに同じ構造で存在しない

(?) なぜドミナントはトニックに行きたがる?

(i) IV音とVII音のトライトーン

長調のIV/VII音は増4度や減5度(不協和な4度)になる

これは全音3個分の音程(トライトーン)を含み、不安定 → 解決したがる

IV → IIに狭まろうとする, VII → Iに広がろうとする

(ii) ベースの倍音の影響

音は基準周波数の他に倍音を多岐にわたる(フーリエ変換のお話)

倍音は低ければ低い音ほど上の周波数に干渉してしまうので

この干渉がコードの動きを予感させてしまう

(sheは動きが止まったように聞こえるが、これは筆者が「ク」のエアプすぎないだろうか?)

・T (トニック機能)

トニック: 安定した感じ D/Sのような緊張感・不安定感がない。
D → T, S → T の進行でキーが決定づけられる。

・S (サブドミナント機能)

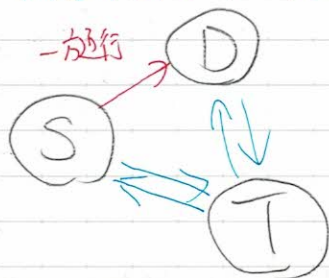
サブドミナント: おだやかな緊張感

↳ サブドミナント・マイナー: VI はキーにあまり影響をおよぼせずに半音下げる変化が可能
一般的に $S \rightarrow \overset{VI}{SM} \rightarrow \overset{V}{T}$ と使う。

・ケーデンスとTSDの連結

ケーデンス (終止形): 曲の終止におけるコード進行のパターン

↳ **ディセプティブ・ケーデンス**: $S \rightarrow T, D \rightarrow T, S \rightarrow D \rightarrow T$
D → T の進行をするとしても、T ではなく T 相当の代理和音に置き換える技法。
S & D のみ、S → D の一方通行に連結する。



① T から S へ D へ 1 つ進行し、
② なんやかんやで T に戻る
のが、コード進行を構成する基本。

・II - V

ポピュラー音楽で特に多用される定番の進行

$S \rightarrow D \rightarrow T$ の S を II 系の代理和音とすることで、ベースラインに $II \rightarrow V \rightarrow I$ という強進行が現れる

・セカンダリー・ドミナント

キーの代表的なコードをドミナント・モーションで解決するような **借用和音**
借用和音なので本来のキーには存在しないドミナントコードになる

・アップラー・ストラクチャー・トライアド

各コードのトッパーノートの組で新たなトライアドに見立てる組み方